

「人形遊びへのいざない
障がいのある子どもたちが教えてくれたこと」

保健福祉学部 社会保育学科 教授 安永 啓司

私が以前に務めていた特別支援学校の幼稚部では、知的障がいのある子どもたちのための社会性の発達を促す遊びの研究に力を入れていました。そこでの子どもたちの小さな成長の瞬間を紹介しましょう。

5歳のダウン症のあるA君は、まだ話し言葉のない、よちよち歩きの幼児でした。

ある日の遊び時間に、これまで人形やぬいぐるみなどにはほとんど目もくれなかったA君が、突如、1体の人形を右手に持ち、ままたごとコーナーにやってきました。そこで、教員がスプーンやカップや料理皿でもてなすと、A君は、左手でカップの中をすくったスプーンを、なんと自分の口元に近づけると「ふっ」と息を吹きかけてから右手に抱いた人形の口元へ運んだのです。

この仕草は、熱い食べ物を冷ます行為のように見えま

したが、当初、私たちは不思議に思いました。なぜなら、教員は給食で彼の食事を介助しますが、教員が彼に与える食べ物に息を吹きかけることはしていません。

つまり、これは、彼が家庭で母親からしてもらっていた体験の再現に違いありません。まるで、彼が母親のふりをして、自分をその人形に見立てているかのようでした。もしかしたら、この遊びの発現の背景には、A君がこの時期に給食をほとんど一人で食べられるようになっていたことも大きな関連があるかもしれせん。

まだ話し言葉のない自閉症のあるB君のマイブームは、園庭の滑り台で遊ぶことでした。

ある日B君は、遊戯室で庭の滑り台にそっくりな、しかし、彼の背丈より小さ

な滑り台を見つけました。彼は、そのミニチュア滑り台に駆け寄って腰掛けようと試みましたが、手すりの間にお尻が入らず、うまく乗れません。自分の体が無理だと悟ったB君は、代わりにそばにあった人形を乗せました。すると、人形は勢いよく斜面を滑り降り、彼は、それを見て小躍りして喜びました。そして、この遊びはしばらくB君のマイブームとなりました。

一般に、自閉症のある子どもは人形遊びをしないと

も言われますが、B君は、その人形の滑り落ちるさまに実際に自分が感じた風や爽快感を思い出していたのではないのでしょうか。

さて、障がいのある子どもたちは、障がいのない子どもたちに比べて、いろいろな力がゆっくと芽生え、そして、時間をかけて発達します。そのために、その

過程でいろいろな能力間の発達の関係性や環境との相互作用などが明確になることがあります。そして、それらが、障がいのない子どもたちの発達を再検討する上で重要な視点になることがよくあります。

人形遊びは、子どもの言葉や認知の発達に良いといっただけでなく、他者の気持ちや意図に気づいたり自らの動作や行為を意識したりするなどの社会性の発達を促す効果もあることがわかってきました。子どもたちの人形遊びのこんな面白さを、少し見直してみてもどうでしょうか。



新図書館完成へのカウントダウン！

新図書館は建物外側がほぼ完成し、内部の造作が進められています。



▲新図書館の内部のイメージ

～新図書館棟の東側にできる施設～

道北地域研究所と地域交流センターが統合して今年4月に発足した「コミュニティケア教育研究センター」が現在の恵陵館1階から新図書館棟に移転し、今後、大学と地域をつなぐ新たな研究拠点となります。

また、座席数300席規模の講堂がつくられ、大人数での講義や講演会、セミナーなど多様な使い方ができます。

新図書館棟には地域交流・連携の場が集約されます。

◆市立大学図書館 開館時間のお知らせ

- 9月20日(火)まで短縮開館(9:00～19:00)
- 9月21日(水)から通常開館(9:00～21:00)

◆問い合わせ

名寄市立大学図書館
☎01654②4199(本館:内線3114/分館:内線2200)